

東に特に濃厚なるを擧げ、又出土の遺蹟の構造を検して、其の何れも古墳墓なるを注意して、一々の型式に依る分類を試み、此の模造品は支那の明器と同じ思想に基くも、其の間直接の關係なく、鏡さ刀劍の模造品の特に多きは寧ろ我が國民性の發露と見るべしとせり。而して最後に是等の製作年代に就ては(一)其の出土遺蹟に埴輪あるもの十箇所あること、(二)石棺に箱形舟形及び長持形あれども家形なきこと、(三)馬具の伴出僅に二箇所なること、(四)土器多きに反し陶器の伴出僅に二箇所なること等より論究して古墳時代の前期とも云ふべき比較的古き時代のものなるべしとせり。なほ此の文中石製模造品に小孔を穿てるもの、多きは櫛枝に懸垂せる爲なりと斷じ、また馬の我が國に習されしは韓土内屬の頃たるべしと云へるは著者の新見解として注意を惹く。

是等の記述中、分類分布の條には増補を要すべきものあるべく、發見遺蹟の状態を録せる章の畿内の部分其他多く地方廳の報告に基きし爲補訂せらるべきものなきにあらざるが如きも、豊富なる圖版を用ひて此の種遺物を分類し網羅記述せるは永く研究上の良參考たるべし。而して其の帝室博物館より此の種學報の公刊を見たるは學界の慶事として特筆すべく、圖を重ねて益々完備せらる可きを信ず。(定價一・五〇、帝室博物館)

●●●●●
日本古建築精華上

岩井武俊編

上中下の三冊に別る。四六四倍版別麗日本紙刷の大冊なり。著者が數年來實地に就いて自ら撮影せる我が特別保護建造物の寫眞を玻璃版となし、これに詳細なる解説を附して、古建築物を集

成する共に、實物に依る日本建築史ならむとせしものなり。今回刊行せる上冊は法隆寺の諸建築物を初め鎌倉時代及び以前の建築を主とし、收むる所二百九十餘棟あり。寫眞は何れも繪葉書型なるも印刷鮮明、中にはよく細部の平法を示せるあり、製本の典雅と待ちて稀に見るところなり。卷頭には伊東、塚本、黒板、内藤諸博士の序文を載す。これ等の諸序に云へる如く此の種の事業は官廳のまさに行ふべき所にして而も未だこれなかりしもの、今氏によりて、なされたるは一に其の熱心と其の好位置に居る結果に依るべく獨り美術の研究者の參考たるにとゞまらざるべし。(定價一八・〇〇 大阪毎日新聞代理部發賣) (以上藤原)

彙報

若狹國多烏浦秦氏所藏文永年間の

船旗及古文書

福井縣史蹟勝地調査委員上田三平氏は昨年十一月と本年一月と二回に向縣下若狹國遠敷郡内外海村田島に出張して同地の荊家秦守一氏所藏の古記録を調査し、鎌倉時代の船旗を始め多數の古文書を探訪せられたり就中珍貴なるは船旗にして長さ二尺四寸八分幅九寸三分、地質は上布を用ぬ上部に北條氏の家紋を描き其下に相模守殿御領若狹國守護分
多烏浦船徳勝也



右國々津泊關々不可有其
頰之狀如件

文永九年二月 日

と書し上端は竹軸を包み中央部を吊す爲めの紐を附せり其由來につきて秦氏に傳へらるゝところは昔二條院讚岐姫流謫の身となつて御所太良(田島の南方に其傳説地あり)に住はれし頃遊覽の爲め屢當時刀禰職たりし秦氏の所有船を使用せられしより其謝禮として殘し置かれしものにて船は三百貫積のものなりしといふも、其文を見れば船の過所にして北條氏の出せるものなるべく此種の遺物として最も古く且つ他に比類を見ざるものなり古文書は建暦三年の補任狀を最古として徳川時代迄約百二十通あり補任狀五通

第五卷 彙報

を一巻としたる外は大なる桐箱の中に收められ秦氏代々の刀禰職補任狀、同訴狀、讓狀、賣渡狀、寄進狀波部多島兩浦訴狀、同和興狀、定文、年貢注進狀等鎌倉時代より南北朝時代のもの最も多し多島浦は鎌倉時代に初は西津御庄内の本所領にして秦氏を刀禰職とし海人を支配せしめしものなるも後波部浦と共に守護領となれり故に其文書も兩浦に關するもの多きを占め先年同縣史編纂員牧野信之助氏の探訪せられたる若狭國三方郡大音氏の文書と相俟つて中世に於ける沿岸漁村の刀禰の職制村役等を徵すべき有益なる史料なり特に其特色とすべきは網場の争論に關するものにして隣接漁村間に海面使用の限定契約の行れ居たるを見るべく網の如きも繩網、夜網、立網、志美網等の名稱を異にし年貢にも鹽、和布、

第二號 一五九 (二八三)

干鯛、鮭桶、飛魚、雜魚等あり下人、家子の讓與亦注意すべし毎月十八日觀音の緣日に殺生を禁斷すべき建武二年の禁制は漁村の信仰を見るべく元和元年の頼母子の證文亦此制度の參考に資すべし泰氏には系圖を逸すと雖ども守高を其祖として崇敬し(建長の刀禰職補任狀に見ゆ)今は庭前の小祠に祈るも明治以前は田島宇南の森中に守高大明神の社ありといふ(會員上田三平氏報)

●京都帝國大學文學部考古學研究報告

第四冊及第五冊の發行計畫

京都帝國大學文學部考古學教室に於ては昨年其研究報告第三冊を出版し九州に於ける裝飾古墳の調査の一部を發表せるが本年に入りては第四冊並に第五冊の發行の計畫あり、第四冊には岡山縣津雲貝塚及び熊本縣藤貝塚の發掘の結果につきて濱田、清野兩博士、島田、梅原、櫛原三氏執筆し人骨發掘の狀況及土器其他の遺物に關する研究を録し、第五冊には昨夏長谷部博士及び同大學の河内國府石器時代遺跡發掘に關する長谷部博士の人骨研究並びに濱田博士、長馬學士等の遺物研究の結果を載す可く、何れも多數の圖版を挿入し本年夏秋の候までに發行せらる可しと云ふ。

●東亞攻究會の設立

凡そ學理と實際と相待ちて初めて諸般の事情の真相を捕捉し得らるゝとせば屠商輔車の關係ある日支兩國間の關係を知らむとて支那研究の重要事なること固より論を須たす即ち英國の如きは夙に其の The Royal Asiatic Society の North China Branch を上海博物院路に設置し居れるなど支那學研究機關は主として洋人に

先觀を附せられ居りし今同じく上海の地靶子路に日本人の手に成る本會の設立せられて純學術的研究機關ならむとすは學界の慶賀すべきことなると共に實際家に參考知識を興ふる所も益し大なるべし。法學士村上貞吉氏に托せられし某匿名家の寄贈に係る金拾萬圓を基とし法學士伊吹山徳司、須賀虎松、原田瓊生、法學士植田忠一等相計りて設立し東亞に關する圖書並に研究資料を蒐集し之を公衆に從覽せしめ以て東亞問題の研究に資し、支那及隣邦の諸問題を研究し、雜誌或は其他の刊行物を發行し、學術講演會を開く由會期第二條に規定あれば英國王立亞細學會と相對立して將來の成績割日に値すべく現在和書四百九十餘冊、洋書八百四十餘冊漢籍一萬二百餘冊の收藏あり。昨年十二月發行の創刊號會報には東亞攻究會設立の趣旨(法學士伊吹山徳司氏)を卷頭として、論說には支那に於ける交通機關の發達(須賀虎松氏)日本の資本と支那の勞働(伊吹山氏)五穀說考(文學士那波利貞)倭寇と江蘇省(法學士植田忠一氏)あり研究資料に孤立の日本、支那の勞働實況、通州と新文明、支那と希臘の藝術的理想(英國王立亞細學會上海支部長スタンレー氏)あり切に今後の發達を希望す(那波)

●九州其他に於ける考古學的調査

京都帝國大學の清野醫學博士は、同大學考古學教室の濱田博士及び櫛原氏と共に、昨年十二月下旬熊本縣宇土郡藤村宮莊貝塚を發掘し、約一週間にして人首十數體其他の遺物を得たるが、同處は經に鈴木博士の二體の人骨を採集せられたる處なり、其の埋葬法は河内國府等に同じく屈葬なるも、方向は一定せず、腕部に貝輪を

搬入せるものありしも、他に附屬裝飾物は無かりしと云ふ。又野博士は藪發掘後阿高貝塚及同地の横穴を調査し、更に岡山縣津雲貝塚の第三回發掘を試みられ、濱田博士の天草郡千束島に渡り同地の古墳を熊本縣史蹟調査員古賀平野兩文學士と共に調査する處ありしと云ふ、又東北帝國大學の長谷部醫學博士も、十二月月中旬津雲貝塚を發掘し、京都帝國大學より橋原氏之を助けたりと云ふ。

● 史學研究會

例會 大正九年二月廿一日午後一時より文學部第六教室にて開催す。

一、アイヌ族に就いて

會員文學博士 喜田貞吉君

石器時代の遺物遺蹟の状態より、アイヌ系統の民族が太古には廣く内地各所に行き渡りて分散棲息せしが、後に渡來せし彌生式民族の爲に中部地方に於て、其の民族としての存在を失ひ、九州南部には比較的多くの遺蹟を止むるも、是れ亦彌生式民族の服する所となり、東部東北部に於て最も繁延せし事情を推測し、更に記録上より、奥羽地方の蝦夷が、今の北海道のアイヌにまで連絡せるものなる事情を明にし、更に所謂日本人及びアイヌの、有史以後に於ける血族混淆の事情を説きて、遺骨比較的研究上の注意を促せり。

一、西游雜感

會員 文學士 矢野仁一君

亞米利加滯在中に於ける所感を主として國會圖書館の情況、ワシントンの都市計畫事業、ハーバード大學圖書館の現狀等に就て紹介せられたり、右終りて午後五時席を本部樓上談話室に移し會員茶話會を開き和氣霽々裏に午後六時半散會せり。

● 讀 史 會

例會 昨年十一月廿一日午後六時より學生集會場に於て例會を開き左の講演あり。出席者三浦、喜田博士、西川、魚澄、桑原學士、岩橋、梅原、橋川、六人部、源の諸君にして九時半散會せり。

一、奈良縣史蹟調査報告を讀む

梅原 末治君

先づ本書の體裁に就て論評し、次に本書中の佐藤學士の大和丹波市附近の彌生式土器の遺跡に關する報告中の土器製作法に就ての説を紹介して考古學上重視すべき事實なりとせし、又大和柳本村に發見されし大鏡の和鏡なりとの説を批評してこれに贊し、本邦模造鏡に就て説く所あり。次に高橋健自氏の報告に係る南葛城郡名柄の銅鏡と銅鐸の併出に關する事實を述べて、管て問題となりし其出土の状態及び鏡の形狀に就いて此の報告を得て明かにせられたりとし、此の鏡を以て和製なりとする氏の説は信すべきも其理由とする鋸齒狀紋様の尖端の内向せるによるとの説を疑ひ寧ろ此の文様は原始的なる編物より發達せるものなるべし云々

一、先住民の特權

文學博士 喜田 貞吉君

先住民が日本民族と接觸するや其多くは農業を學びて所謂おほみたら(大郷田族)になりたるが尙前代の風を繼いで漁獵を以て生活する山人海人あり彼等は概ね山野を跋渉する漂泊の民なるが彼等の間には日本の國土は個人の所有權を認められずして共有なりとの觀念あり木師屋と云ふ賤民が里より三分の一以上の山地は其自由なりと稱する如き或は大乗院寺社雜事記に見ゆる土器座の賤民が其邊の土を自由にせりて故障を入られし如き此消息

を物語るものなりされば彼等先住民族の遺民は其生活の爲めに或種の特權を認められ或者は山野に入りて木を伐り或者は落穂を拾ひ或者は一定區域に於ける髯馬牛を獲得するを得たるが如し云々

大會 十一月三十日午後一時より學生集會場に於て本會第十回創立記念大會を公開し現下の社會問題に關聯せる各講演及び今回贈位せられたる荷田春滿、赤塚芸菴、朝山意林菴、藤林普山等徳川時代學者の遺墨、遺著、並に徳川時代初期に於ける町人の豪華の風俗を徵すべき衣裳、繪畫を陳列し一般參會者の縱覽に供へ且つ陳列品中の一部を記念葉書に收めてこれを頒てり聽衆約二百餘會なりき。

一、東西封建制度の相違と現時の社會問題

文學士 牧 健 二君

先づ東西に於ける封建制度の發達を比較して、知行制度及主從關係の點に於て東西其の軌を一にするも我國に於ては單に縱斷的關係のみ發達し、西洋に於ては縱斷的關係と共に横斷的關係が發達し個人の自由てふ觀念が存在したる事を指摘し現時の我國社會組織が往時の封建的遺風を多く存する事を述べ吾人は須く民族の要求に應じて歴史を導かざるべからず云々

二、江戸時代の治者と被治者との經濟的關係

文學士 魚澄惣五郎君

此時代の治者とは武士にして被治者とは農工商人なり打續く太平の結果、交通の發達を促すと共に貨幣の流通盛となり町人階級の富の増大を來し一般社會の奢侈の風に赴くに從ひ亦武士も此風潮に浸染するに至れり。從て一定の封祿に衣食する武士は勢ひ町

人より借財せざるべからず、遂に經濟上に於ては治者と被治者の關係は反對となつて寧ろ武士は町人の左右する所となり。諸家の間に武士の經濟的方面の救済を論議せらるゝあるも大勢奈何ともし難く遂に幕末に至り外部の刺撃の盛となり之れに堪ふる能はざるに至て瓦壤せるなり云々

三、江戸時代初期に於ける民間の豪華の風俗特に衣服に就て

文學士 江馬 務君

江戸時代初期とは、享保以前を含むものなるが、此初期と稱する時期に於て亦明暦の振袖火事を以て前後を區分す前期は桃山時代の趣味尙殘せるが後期に至りて江戸時代の色彩濃厚となり元祿趣味の發達を來せり家康は質素を以て世を率わんとせしが漸次奢侈の風盛となり寛文八年には奢侈の禁あり倫子、紗等の衣服を禁じたりされど社會の經濟的好況に從ひ奢侈の風は益増長し所謂分限者衣裳競べなごを行ひ豪華を競へり元祿時代に至ては其の趣味複雜となり模様、色彩、技術甚しく分化し各其新奇を尊び豪華を極むるに至れり。かくて華美の極に達せし元祿趣味は享保に至りて縞模様、飛白模様の流行となり、色彩に於ても茶、鼠色の如きもの喜ばるるに至りき云々

四、歴史上に於ける中等階級

文學士 西田直二郎君

本問題を論ずるに先づ三段の考察あり第一中等階級の觀念第二中等階級政策第三中等階級の思想是也、第一に富の發達は中等階級の意識の起原なり、第二に各時代に於て爲政者は常に奢侈の禁止を以て其主なる政策とせり、第三にゾンバルトが中等階級の徳目として節儉と信用とを挙げしが如く我國中等階級間にも消費に

對する節約び勤勞の道德の稱道せられたり、かくて中等階級の發生の由來久しく其精神は時代によりて多少の相違あるも主體に於て奢侈に憚まざるゝものにて、勤勞、節約の思想は中等階級間に其精神として發達したるなり云々

五、福神の研究

文學博士 喜田 貞吉君

福神の研究は社會史の一部にして世態人情を知るに最も必要なり我國に於て最も古き福神は山幸、海幸にして狩獵時代族の望欲を充足する所の神にして幸(サチ)は福(サキハフ)なり農耕時代に入りては五穀の神にして倉稻魂神、御饌津神等祀らるゝが、ウケ、又はケは食物の義なり次に漂泊民の神には道祖神あり行旅の生活を當めるものが平安を祈るによりて發生せるものなり輸入の神々には四天王あり毘沙門天、辯才天、大黒天等は足利時代に入りて福神となり云々。

六、江戸時代の社會的崩壞

文學博士 三浦 周行君

徳川幕府の社會政策は極端なる武士中心主義にして嚴重なる階級制度を勵行したるが、田沼時代を経て賄賂公行するに至りて官規の紊亂甚しく、經濟上の困難は慶金銀貸借の訴訟となり、其家族が一人扶持を給せらるゝの故を以て反て改易を望むに至れり、且つ家長專制の家族制度の弊害は次男以下の冷遇となり、長男ありも時として貧乏の子息を養子とし家督相續も有名無實となり亦御家人棟の賣買行はれ、家族制度も亦漸く崩壞するに至り、幕末に於ては漸次武士、百姓、町人の區別は撤廢せらるゝの傾向あり社會の崩壞はかくして漸く現れ來れり。而も幕府が經濟的困窮によりて資産家に頼り人物も亦これに採りし結果はいよく政

治上、社會上の崩壞を招來せり云々

尙當日陳列品中の主なるものを擧ぐれば第一部に於て本居大平翁の荷田春滿の畫像(岡部讓氏藏)、鶴類從三代格考二册(羽倉信一郎氏藏)、荷田人人劍學啓一册(羽倉信真氏藏)、春滿の書牘、(羽倉信一郎氏藏)、朝山素心筆和歌短册(井上通泰氏藏)、同書牘(三浦周行氏藏)、赤塚芸菴筆長卷雜記(赤塚政治氏藏)、藤林善山著譯鍵(初版)一册(岡部讓氏藏)、慶長風俗繪屏風半双(吉川觀方氏藏)英一蝶筆四季繪卷二卷(京都市立美術工藝學校藏)等とす。

例會 十二月十九日午後六時より昨年最終の例會を學生集會場に開催す、出席者三浦博士西田助教授魚澄、下川、牧、鈴木、桑原諸學士及び學生數名にして今回は特は安政三年十二歳にして一條家に御側役を勤めて當時の禁中及び公家間の事情に精通し京都唯一の故老なる下橋敬長氏を請じて其實歴談を聴けり。就中氏が安政四年に参加せし小朝拜の儀より當時の公家の財政状態、一條忠香を始め三條實萬、近衛忠熙等の人物觀等氏の實歴に係る丈興味の津々たるものありたり。

例會 一月卅日午後六時より本年劈頭の例會を學生集會場に開催、出席者三浦博士を始め學生數名あり。先づ吉記治永四年十一月廿一日の條及び吾妻鏡 永久三年五月十九日の條を輪讀して三浦博士の解説を聴き次に左の講演あり、

内閣文庫所藏の大乗院記錄に就て 文學博士 三浦 周行君
今回内閣に所藏する奈良大乗院記錄(松殿男跋本)を調査したるか、本記錄は大乗院歴代の門主の日記を始め各種寺務に關する記

錄及び文書を含み概れ足利時代のものなり。記事の内容は寺領に關するもの最も多く兵庫關に關するもの少らず唐船日記の如きは當時に於ける明國との貿易の事情を知るに好箇の資料たり。其他一般歴史に有益なる史料となるもの亦尠からず。(イ)文保の御和談に關する文書、(ロ)後醍醐天皇の御討幕の際に於ける内外の形勢、(ハ)應永六年大内義弘の亂に於て幕府と關東公方とが互に奈良衆徒を懐柔せんとして努めし事情、(ニ)長祿三年の神璽出現に關する記事等の如き是也。興福寺に屬せし所の諸種の座に關する記録の如きは亦當時の經濟狀態を明にすべき資料とす云々。

例會 二月十九日、午後六時半より學生集會場に於いて例會を開く、出席者、浦喜田博士、西田助教、中村、魚澄、江馬、下川、牧、富森諸學士及び岩橋、橋川、山本の諸君なり。講演の次第左の如し。

一、柔道史上に於ける陳元贊 文學士 下川 潮君
日本柔道の起源に關する諸説を大別すれば、これを支那に求むるものと本邦に求むるものとをの兩説となさざるべからず而して前者の説の中最も重要なものを陳元贊説なりとす正保年中、陳元贊が江戸西久保に滞在し、磯川、三浦、網野の三人の浪人、元贊より支那の拳法を聞きこれにそれれ工夫を加へ遂に日本柔道を大成するに至れり次にその史料を擧げんに拳法秘書、和事始、武訓等ありて何れも陳元贊説を以て定説とすなりが如し、然れども元來朝以前に必ずしも柔道なきに非ざりしは關口家記録、山鹿素行の醜所發筆等これを證すべし、要するに陳元贊説は拳法秘書に出づるが如くなれども未だ書に接せず恐らくは贊の崇拜者の一人の筆

になりたるなるべく支那崇拜の傾向ある時代の産物として見るべきに非ざるかさばいへ陳元贊のわが柔道史上に寄與せる所は特筆大書すべく其功決して没すべからず元贊は支那の拳法を我國に傳ふると共に殺活法(當身法)を傳へ日本の柔道道は其の刺戟を受けて工夫改善を凝せしなるべし云々。

二、尊秀王事件に關する疑問の一二 文學士 中村 直勝君
嘉吉三年五月二十六日に起りし神器奉還事件は看聞御記を始め康富記護正院文書等に見ゆれども、尊秀王が果して南朝の皇胤なりや、又は源尊秀と稱する臣下なるやは未だ輕々に論斷すべからざるが如く、一部の事件關係者が何故比叡山に逃れしか而して、叡山の勢力を利用し得ざりしかば尙ほ疑問とせざるべからざれども思ふに護正院を頼りて登りしものに非るが云々。

三、弘法大師の入定説について 文學博士 喜田 貞吉君
講演の詳細は本誌研究欄に掲載せらるゝを以て略す。

● 支那學會

大會 昨年十二月七日午前九時より京都帝國大學々生集會場にて開催、教育學生卒業生一般來聽者等合計百四十餘人。文學士稻東猛氏は蕪村の藝術と支那文學と題し蕪村が作品に支那文學の影響の反映大なるものあるを指摘し白氏文集、袁中郎集、唐詩選淵明集、等より疏案せし俳句を作講ある點を論述す。文學博士狩野直喜氏は儒の意義なる題下に儒語の典故其名義及び其稱呼濫觴時代、孔子及び其學徒を儒と稱する理由並に其の稱呼命名者の那邊に存する問題に就きて詳論し、文獻上にては周禮論語に見ゆることより其の迂遠遲緩なる態度に亘り新見解を述べ。此の間午

饗會を催すや出席者實に四十人、午後一時再開狩野博士其の結論を述べられて文學博士内藤虎次郎氏の陳列品説明に入り、翰苑が

唐時代の書籍にして亡逸せるものなりしに偶々顯慶五年三月十二日の奥書ある此の零墨を發見せしことより史家にさり貴重なる史料を提供することの夷狄に關する記事中に多く存せること、別して聖德太子の十二階の條に一日麻卑兜吉能。華言大德云云とありて大德をかく和訓せし事を知り得るなど珍らしき發見多きことを説明す。文學士那波利貞は、遊人氏の傳説と、火禁の風習と題し印度及希臘に於ける火の發明の起原より火の文字の論證に入り、Thara

の數掘品に見ゆる萬字紋様と支那古代の火の字と關係あることを指摘し遊人氏の傳説は春秋より戰國頃に胡地より支那に輸入せられたる傳説ならむと推論し火禁の風習は時間の都合上省略す次に西村時彦氏は醫學の研究に就いて、と題し蘊蓄を披瀝して醫學の名義其の傳統を論じ屈原の騷賦は道術を華藻に寓するものにして言志の什を以て載道の辭を兼ねる點に於て實に支那文學中一大異彩を放てるもの此が研究には王逸の注を基とすべく他の注は皆これより淵源流派せるに過ぎざるを謂ふ文學博士桑原、隱藏氏は支那婦人の纏足に關し其の起原は漢雜事秘辛に據る後漢、以下南北朝説、唐中世説、唐末説、五代説等あるを列舉して一一之に批判を加へ、北宋以來此の流行の確實に存せることを論證し近代に於ける天足會不纏足會のことに論及せられたり、午後六時閉會、會場に唐鈔本毛詩殘卷、唐寫本翰苑以下醫學に關する研究史料、纏足に關する漢洋史料、寫生圖等を陳列し非常の盛會なりき。

例會 一月廿一日午後五時より學生集會場にて羽田助教授の留

學送別の爲開催教育學生卒業生出席、羽田助教授は其の旅程等に就て説述せられ饗會を共にし午後十時散會。

例會 二月廿五日午後六時より向處にて開催矢野教授の歸朝歡迎會さて同教授の講演あり即ち亞米利加、特に其の支那との關係の題下に支那とアメリカとの歴史的關係、亞米利加に於ける支那學者、アメリカに於ける支那書籍蒐集の情況と其の整理に就いて二時間半に亘り詳細に述べらる。茶話會に移りて談論交歡午後十時散會す。

●東京府民政史料展覽會

東京府にては二月廿二日より同廿九日迄御茶の水東京教育博物館に於て民政史料展覽會を開催し、同府が昨秋以來探訪したる史料及個人の出品に係る文書類約六千點を一般行政及職制、土地、人事、租稅、夫役御用、土木交通運輸、警察司法治安、貧化救濟備荒衛生、宗教教育世相等に分類したるもの又外に石器及古墳時代遺物、古寫經、古版經、高札類、拓本、古繪圖類數百點を陣列して一般の觀覽に供し當會期中二回に涉りて民政史料に關係ある諸家の講演會を催せり、今文書中主なるものを擧ぐれば品川妙國寺文書、世田ヶ谷ボロ市設立關係文書、五日市廣德寺文書、平井郷傳馬の文書、青梅町三田逸三氏文書、小泉次大夫四ヶ領用水堀の際普請場巡行の圖、西久保村開村當時關係文書、武藤野新川の恩人抑立村川崎平右衛門氏文書等にして、幕末雜新史料として藤岡屋由藏日記(狩野亭吉氏藏)を始め白川柳三郎氏(深川區)瀧木直一氏(神田區)久須木氏(日本橋)の出品せる『聞書』及『日記』等あり、其他寶曆年間西多摩郡悲願寺住職如環か手づから刻したる

木製活字及其の活字にて刻したる經文の如き珍品少からず、因に東京府にては此機に際し特に東京附近大名所領分布圖、東京附近住宅地區發達圖、江戸役屋敷數圖、江戸消火組織圖を編纂したりといふ。

● 播磨國明石史談會

明石郡史談會は去大正五年十二月の創立にして明石郡内に於ける郷土史料の蒐集史蹟の踏査及び保存を目的とし主として郡内小學校教員を會員とし毎年三回の臨地講演及び踏査一回の講演會を開くこととなり居りしが、昨年會長の更迭と幹事の改選とを機として一層會の充實と發展とを圖らん爲め一般同好者の會員を募集し兼ねて古文書古器物展覽會を開催する事となり恰も明石市制施行に際したれば從來の郡史談會を明石史談會と改稱し十二月七八兩日を以て明石市公會堂に展覽會を催せり、出品物は古文書、社寺緣起、歌俳句消息、系圖、地圖、播州藩札、舊紙幣切手類及び石器、古墳時代遺物、古錢、武器、裝束等にして參考品として支那古銅器、古錢、南洋土人製作物等五百餘點を算せり、出品物の主なるものは左の如し。

- 稻爪大明神(大藏倉) 太山寺、密藏院、寶藏寺(林崎村) 轉法輪寺(垂水村) 各緣起(太山寺緣起は尊裕親王筆) 法光寺文書(美濃郡中吉川村) 伊藤仁齋、大石良雄書狀、足利尊氏書簡(觀應三年八月三日、岡崎僧正宛、京都本法寺藏) 源氏物語系圖(權中納言藤原朝臣兼安井正氏出品) 文祿役軍船大井畫の一部、大進大明神船渡御繪卷(桃木武平氏出品) 明石記、享保年頃寫大井清氏出品
- 林崎渠記(明曆三年堀割工事の由來書) 播磨藩札の原圖及各藩の

印鑑(參勤交代の際關所にて使用せしもの、前田惇氏出品) 播州各町村發行諸幣五百四種(姫路藤田滿治氏出品) 銅鐸(武庫郡阿保親王墓附近出土親王寺出品) 外道佛(切支丹信者がマリアを佛像化して禁制の日を遁れ信仰せしもの、福原潜次郎氏出品) 緒方洪庵、帆足萬里、難波抱節書簡一卷(柳川芳人氏) 齒醫シーゴルト手蹟(同人) 足利義政好、靈線線(詞黎勒の果實を五彩線にし綴綴したるもの) にし藥玉の起源? 矢倉市田氏出品(同會幹事矢倉市田氏報)

● 歐米史界

「古代文明の廢頽」羅馬興亡史の名著を以て開ゆるフェレロ氏(Guglielmo Ferrero) は昨年九月號の *Revue des Deux Mondes* 誌上に *La Ruine de la Civilization Antique* の一篇を寄す、羅馬世界破滅の因由を論じ、且特に表題に *Reflexions et Comparaisons (回想と比較)* として現代歐洲社會の趨向を氏の觀察せる古代末期の狀勢に對比し居れり。羅馬史に就いて獨逸學者とは一風變りし獨特の見解を持ち、加ふるに論辨叙說の手際頗る鮮やかなる氏が、斯くの如き好箇の大問題を提へ、現時の社會に對し警告を發せる該論文は吾人に取て甚だ興味深きものなるべし。其要旨は左の如し。

威武輝き文化榮々し羅馬帝國が三世紀に入りて俄然混亂に陥り衰境に沈みし所以は、元より是迄除々に進行し來りし思想上社會上經濟上の感化影響に由ること勿論なるも、特に此時期に當り國家制度の上に未曾有の變革を來し、やがて帝國の運命を破滅せしむべき政治的危機を招きしことを直接當面の因由たりしを察せざるべからず。これ他にあらず、國初以來羅馬政界の支

柱たり、帝政時代に入りても猶依然皇帝獨立容認の樞府たりし元老院が全く實權を失ひ空名の機關と化せしことなり。是に至つて帝國には臣民の依るべき權威亡はれ正統の主義廢れ軍隊跋扈内亂續發の紊亂狀態現出し、古代文化世界の破壞没落招致せらるゝに至りしなり。現代の世界大戰は過去五十年來思想心情や將た階級種族人民の間に於ける混亂に西方文明が消磨せられつゝある際、更に中欧並びに露の帝權を一舉に覆へして政治上不安なる混沌狀態を齎せり。今や歐洲には三世紀の羅馬帝國の如く支配の權利及び服従の義務を有すもの並びに其限界に就いて明確なる原則在らざるなり。斯くの如くば吾人は過去の幾時代の勞作によつて集積せられたる文化の財寶を大部分消散枯朽せしむべき革命及び戰闘を繰返すべき危機に臨みつゝありとすべきか。

現代に對する氏のヘシミスチックなる感想の當否は問はず、他迄其得意とする政治史の見地より羅馬衰亡の由來を論ぜしは、非難すべき點鮮らされども兎に角一見識として注目し値すべき所説といふべし。殊にケーザル時代以來元老院が全く實權無き形骸と成り果しものなりとするモムセン等獨逸史家定説を却け、帝國に眞の革命を齎し最初の專制君主となりしは三世紀の *Septimia Severa* なりと論斷せる邊は痛快なる筆鋒なりといふべし。

マイチツク氏論文集 獨逸史境屈指の大家たるフライブルグ大學教授マイチツク氏は先頃「十九及二十世紀に於けるプロシヤとドイツ」と題する論文集を公にせり。こゝは主として著者が從來獨逸史學雜誌其他に於て發表せしものを収録編纂せるものなれども

最近戰時中に執筆せし諸篇の如きは特に注目すべきものたるを失はず、又以て西南獨逸學者の對普魯國思想戰爭觀を窺知し得べきものなり。近清米國史雜誌の紹介に依れば、全卷五部に分たれ、第一部は十九、二十世紀に於ける普及獨の一級史、第二部は發動及復興時期第三部はフレデリック・ウイリアム四世及ビスマルク若年時代に關する諸論文を蒐め居り第四部は獨逸の歴史著作及其研究に就いて、第五部は世界戰役の時期に關するものより成れり。中について、氏は第四部獨逸史學に關する論述に於いてラムプレヒト氏の社會心理的研究、民衆運動集團の努力重視の態度を却け、ランケ氏の箇々中心主義を尊重すると共に、新しき歴史著述はトライチケ氏一流の歴史畫的描出誇大の過誤を除々に訂正してランケ氏の公正客觀的態度に追隨せざるべからざる旨を主張し居れり。

歴史研究者使用叢書 英の *The Society for Promoting Christian Knowledge* に於て一昨年末以來 *G. Johnson J. P. Whitney* 兩氏監修の下に *Helps for Students of History* と稱する至廉なる叢書を刊行し斯學入門者に多大の資便を供し居れり。今日に至る迄十餘の各篇熟れも學界知名の士の執筆せる所にして、廣く各方面の史料取扱方法や史學の理論補助學にも亘り有益なる事項を捉へ初學の啓導に盡す所多きが如し。最近物故せし英國經濟史の權威カニンガム氏の如きも *Hints on the Study of English Economic History* なる最後の述作をこの叢書中の一篇として公表し居れり。遅けるシュレヨール氏、事聊か舊聞に屬すれども、先年物故せしブルンチル氏と相並んで獨逸法史界の耆宿たりしハイデルベルヒ大學教授シュレヨール氏 (*Richard Schroeter*) が昨年正月の

會報

初め突如永眼に就きしことは、前記カンニングム氏の卒去と共に去歲歐洲史界の二大損失なりと云ふべし。氏は一八三八年六月オメラニヤの出生にてアルンテル氏より長ずること二歳正に七十九の高齡に達せりと雖も、猶斯學の重鎮、死前彼が畢世の名著「獨逸法史」第六版改修中なりしと云へば、その易發は學界の恨事と稱すべし。氏はボン大學に學び、一八六六年同大學の員外教授、七三年正教授となり、同年ウィルツアルクに、八二年ストラスブルクに、八五年ゲツチンゲンに職を轉じ、八八年遂にハイデルベルヒに招聘せられ以て今日に及べり。往年かのヤコブ・ケリムを授けて Weistümer の蒐集公刊に従事し、その五、六、七卷は全く彼が單獨に努力せし結晶たるなり。後アルンテル氏と共にサプグニイ創立法史學報ゲルマニ部門を擔當し斯學研究に盡す所頗る多大なり。著書としては「獨逸に於ける夫妻共有財産法の歴史」(二卷、一八六三—七一年)「フランク民法研究」(一八七九年)「獨逸のローランド(Roland)」(一八九〇年)「獨逸の皇帝傳説」(一八九三年)「ワイヒゴルド(Weichild)」(一八九九年)等ある上、諸雜誌に發表せる論文にも後進に有益なるもの頗る多く、かの獨逸學雜誌四三卷所載の「フランク族の起源」の如きは一般史家の間にも尊重せらるゝ、研究學說なり。而も氏の代表作として世界的に喧傳せらるゝは前述の「獨逸法史」(初版一八七四年)なるが、其所論は大體に於いてアルンテル氏の意見と相一致せるものにして、亦以て獨逸法史學界に於ける最有力なる學說を表示し居れるなり。(植村)

編纂會 三月二日午後零時半より文學部陳列館貴賓室にて開催。西田、坂口三浦各評議員中村桑原植村岩橋那波各委員出席第五卷二號の編纂事務を處理したり。
 正誤 前號所載昨年の史學地理學界關中考古學界の末尾に署名「梅原」を脱す。

會費領收報告

- 金壹圓也(大正四年度會費) 栗野秀穂
- 金五圓也(大正六年度後半期以降九年度七拾五錢不足) 上村治八
- 金貳圓八拾錢也(大正七・八兩年度) 大屋徳城
- 金壹圓五拾錢也(大正七年度) 圓谷弘・廣瀬鎌之助 竹林熊彦
- 金壹圓五拾錢也(大正八年度) 神田喜一郎
- 金五拾錢也(大正九年度會費追加) 松平乘統 川村徹介
- 金壹圓也(大正九年度上半期) 北村壽四郎 井上賢順
- 金貳圓也(大正八年度半期及九年度七拾五錢不足) 徳富猪一郎

金壹圓五拾也(大正九年度會費、五拾錢不足)

鹿兒島縣福山中學校

日高重孝

吉井 太郎 齋藤 俊次 柴田 喜八

東京市本郷區湯島新花町、靈雲寺内

和田英松

丸山 源八 三條 西公正 勝浦 柄雄

山口縣々立岩國中學校

滋賀 貞

下村 三四吉 米澤 元健 末松 吉次

東京府下澁橋町角筈七二五

山本信哉

羽倉 信一 耶 花見 朔巳 古川 岩太郎

京都市上長者町烏丸西入

安松長一

高林 誠一

(右紹介者、三浦周行)

山崎 藤吉 小林 民造 押上 森藏

兵庫縣々立豊岡中學校

鈴木重雅

堀 常次郎 鈴木 重雅 稻葉 倉吉

(右紹介者、佐野秀俊)

井上賢順

河野 省三 小川 劍三郎 關 世男

京都市、平安中學校

上田秀吉

瀨野 馬熊 黒井 治徳 大橋 金造

(右紹介者、桑原親通)

小牧實繁

上田 秀吉 上野 臺次 森 虎雄

大分縣西國東郡高田町

江藤徵英

増山 重光 山田 角人 日高 重孝

(右紹介者、天沼俊一)

同

小松 倍一 住田 智見 米田 恭禮

京都帝國大學文學部史學科

高橋邦枝

舟木 益五郎 江藤 徵英 小牧 實繁

(右紹介者、那波利貞)

岩松五良

大野 仁夫 口入 田覺了 淺野 長武

東京市本郷區森川町一、蓋平館本店方

大井久五郎

金貳圓拾五錢(大正九年度會費拾五錢預)

東京市下谷區下車坂町三五

芳野廉三

●會員動靜

入會

小田内通敏

東京市小石川區大塚坂下町一四七

田保橋 潔

東京市外大久保百人町一二八

岡久 毅三郎

東京市小石川區表町一〇九、明倫學館

西田 宏

神戸市役所市史編纂室

小川 劍三郎

(右紹介者、平泉澄)

東京市下谷區池ノ端仲町

上野 臺次

東京市本郷區駒込千駄木町五九

東京市牛込區神樂坂通南北社

(右紹介者、島田貞彦)

京都市室町頭、大谷大學内

(右紹介者、橋川正)

退 會

長 壽 吉 服 部 俊 岸

込 田 喜 次 郎

●寄贈交換圖書

考古圖集 (第一集)

考古學會

新聞雜誌ノ創始者柳河春三

名古屋史談會

史學雜誌 三一の一・二

史 學 會

歴史地理 三五の一・二・三

日本歴史地理學會

考古學雜誌 一〇の五・六

考 古 學 會

經濟論叢 九の六・十の一

京都法學會

國學院雜誌 廿六の一・二

國學院大學

飛彈史壇 五の四

飛彈史談會

佛書研究 六〇

佛書刊行會

六條學報 二一八・二一九

京都佛敎大學

東洋哲學 廿七の一・二・三

東 洋 大 學